

学習院大学図書館

第 270 回 所蔵資料展示

学習院大学図書館所蔵

貴重資料展

「Fauna Japonica (日本動物誌)」





Philipp Franz Balthasar von Siebold (1796-1866)

ドイツの医師、博物学者。1796年にドイツの Würzburg で医学の名門の家に生まれる。1815年 Würzburg 大学に入学し、医学のほか生物学、人類学、民族学、地理学などを学んだ。大学卒業後に開業したが、「オリエント」で調査ができる地位を求めて 1822 年オランダのハーグへ赴いた。1823 年オランダ領ジャワへ渡り、同年、長崎に来航した。

長崎では出島の商館勤務の傍ら、学術兼診療所（鳴滝塾）を開設した。鳴滝塾は、シーボルトにとって近代医学を伝授するだけの場ではなく、日本を調査するための拠点でもあった。鳴滝塾に集まった高野長英、二宮敬作などの弟子たちに研究テーマを与え、オランダ語の論文を提出させ、彼自身の日本研究資料にした。1826 年にオランダ商館長の江戸参府に随行し、その往復で生物学者である Heinrich Bürger を助手として動植物の採集、測量、観測などを行った。旅行の往復や江戸滞在中は、伊藤圭介や宇田川榕菴など著名な蘭学者たちとも親交を結び、学術的な「交換（贈与）」を行うと共に、コレクションと知識の交換の機会をもった。

1828 年にオランダへ帰国する際、シーボルト事件（後述）が起こり、国外追放処分を受けた。帰国後は、ライデンにてコレクションの整理、展示そして植物の移植などを行った。晩年はドイツに帰り、1866 年ミュンヘンで死亡した。



シーボルト事件

1828 年、任期を終えてオランダに帰国しようとした際に、乗船が暴風雨のため難破、修理のために陸揚げした積荷から国外持ち出しが禁止されている伊能忠敬作成の日本地図などがあることが発覚し、大事件となった。

1826 年の江戸参府では、幕府天文方高橋景保からクルーゼンシュテルンの「世界一周記」などと交換に、伊能忠敬の日本沿海実測図をもとにした地名入りの日本略図蝦夷地図、間宮林蔵「東鞆紀行」を贈られた。幕府眼科奥医師土生玄碩からは、開瞳術伝授と交換に、将軍拝領の葵の紋服を贈られた。国外持ち出しを禁止されている品が積荷から発覚したため、シーボルトは国外追放処分を受け、この事件に連座した日本人も処分を受けた。高橋景保は死罪、土生玄碩は改易の処分となり、高橋景保の配下の者、オランダ通詞ほか多数の関係者、洋学者も処罰され、蛮社の獄に先立つ洋学者弾圧事件となった。



日本研究

日本からの帰国後、シーボルトは日本から持ち帰った膨大な資料、標本、生植物をもとに研究を行い、「NIPPON（日本）」「Flora Japonica（日本植物誌）」「Fauna Japonica（日本動物誌）」を刊行した。

「NIPPON（日本）」（1832～1851・全 20 巻）は日本についての総合的研究である。日本の地理、歴史、文化、宗教、経済的活動など多岐にわたっており、以後の

西欧人の日本研究の基礎となった。

「Flora Japonica（日本植物誌）」（1835～1870・全2巻）は、Joseph Gerhard Zuccarini の協力を得て、共著として出版した。140種の日本産植物が扱われ、うちウメ、モミ、アカマツなど52種は西欧の学界に未知の新種であった。

後述の「Fauna Japonica（日本動物誌）」でも日本産動物を扱っており、シーボルトの著作物によって、本格的に日本及び日本の動植物がヨーロッパに紹介され、西洋における日本学の発展に大きく寄与した。



「Fauna Japonica（日本動物誌）」

同誌は、シーボルトが日本滞在中の1823年から1829年に採集した膨大な動物標本や、日本人絵師川原慶賀などの描いた下絵をもとに、ライデンにある国立自然史博物館の動物学者3名（C.J.Temminck, H.Schlegel, W.DeHann）との共同研究により完成した。執筆は国立自然史博物館の動物学者3名が担当し、シーボルトは標本の収集、データ記録、発送、研究委託などを担当した責任者である。

フランス語で記述された脊椎動物4巻とラテン語で記述された甲殻類1巻の合計5巻から構成されている。予約者を募って受注刊行され、図版10葉と本文を含むものを1分冊とし、執筆者が書き終え、図版の印刷が終わると刊行し、配布した。1833年に最初の分冊が刊行された後、1850年に完結するまで17年間にわたり42分冊が刊行された。

■「Fauna Japonica（日本動物誌）」の構成

- ・「CRUSTACE（甲殻類）」篇（1833-1850）：182種　＜本文はラテン語＞
- ・「REPTILIA（爬虫類）」篇（1834-1838）：16種
- ・「MAMMALIA（哺乳類）」篇（1842-1844）：63種
- ・「PISCES（魚類）」篇（1842-1850）：330種
- ・「AVES（鳥類）」篇（1844-1850）：201種

脊椎動物

＜本文はフランス語＞

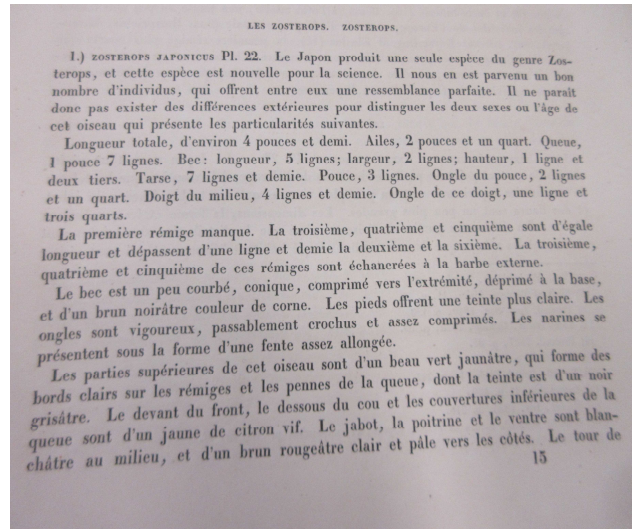
当館では大正時代初期に受け入れている。各篇ごとに製本されており、「REPTILIA（爬虫類）」篇と「MAMMALIA（哺乳類）」篇については2篇を合冊製本している（計4冊を所蔵）。

記載された800種近くのうち、313種が新種である。その中にはヒバリ、トキ、メジロ、ブリ、スズキ、イセエビ、マダイなどが含まれ、日本を代表する各種の動物が西欧の学界に紹介された意義は大きいとされている。

シーボルトの先駆者であるC. P. Thunbergも多数の動物標本を収集し、日本産の魚類や昆虫を新種として著書で発表した。シーボルトは図版を含む刊行物によって、日本産の動物をより身近に紹介し、それらについての研究を一層充実させている。「Fauna Japonica（日本動物誌）」は印刷部数が限られており、高価でもあったが、やがて日本にももたらされ、我が国の動物学発展のための基礎的文献となった。



「ZOSTEROPS JAPONICS (メジロ)」の 図版と解説文



メジロは「Fauna Japonica (日本動物誌)」で新種として紹介されている。

<参考文献>

- (1) 日本大百科全書. JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2019-11-12)
- (2) 世界大百科事典. JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2019-11-12)
- (3) 山口隆男. シーボルトと日本の自然史研究. 日本思想史. 55 p. 43-68 (1999)
- (4) 塚原東吾. シーボルトは何をした人物なのか?. 地理. 61 p. 4-14 (2016)
- (5) 石山禎一 他. シーボルト年表: 生涯とその業績. 八坂書房 (2014)

学習院大学図書館所蔵 貴重資料展

「Fauna Japonica (日本動物誌)」

発行日: 令和元年 11 月 22 日

発行者: 学習院大学図書館

担当: 情報サービス課 橋本 尚美

情報サービス課 岸 利幸

本冊子は大学図書館ホームページでも公開しております

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/glim/collection/exhibition.html>